

## ドストエフスキーを読む会 報告『罪と罰』第7回

2025年10月11日  
報告者 西川直子  
参加者 12名  
二次会参加者 9名

西川さんの発題:「答えのない問い」にどう向き合うか:『罪と罰』から探る救済へのアプローチ  
『罪と罰』は生死、貧困、不平等といった「答えのない問い」にあふれている。だが、豊かな生活、社会が保障されている現代日本のような環境に暮らす人はこの疑問と向き合うことが難しい。極限状態で暮らしているラスコーリニコフは自分の理論しかするものがないと思い込んでしまった。その理論は平凡で陳腐なものであり、論理的にも破綻している。ラスコーリニコフは無力だが、ソーニャの愛によって救われる。

言葉は無力だが、愛には力がある。その愛の言葉には力がある。ラスコーリニコフのように極端な考えに陥った時、どんな言葉を掛けたらよいのか? 彼の理論は不条理な人生に対する絶望的な叫びであると思われる。このような前提に立ちつつ、ラスコーリニコフが陥った「実学的苦悩」について考えたい。

上記の発題に基づいて議論が進められた。以下、議論になったことがらをランダムに紹介していきたい。

- ・ この小説は「貧困」をキーワードに読むというより、別の角度があるのではないか。ラスコーリニコフは家庭教師をしていたら貧困にはならなかった。彼はお金の使い方がわからないのではないか。
- ・ 生きることの肯定感が必要だ。(自己肯定感、絶対的肯定感に関する意見が頻出した)
- ・ ラスコーリニコフは二人の人間を殺してしまった。彼は凝り固まった人間だ。痛い目を見ないとどうにもならない。
- ・ ラスコーリニコフの理論は陳腐だが破綻していない。人間の進歩における基本原理だと思う。社会制度、社会体制ではない秩序は壊れていくから。
- ・ 極端な思想に走った人をどう救うか、という問題がある。
- ・ ラスコーリニコフは自分がどういう生き方をしたいのかわかっていない。結局、彼の救いは愛である。
- ・ 「答えのない問い」というテーマがこの作品の魅力であり、人を惹き付けている。その問いに答えようとすることが本作品を読む意味ではないか。
- ・ ラスコーリニコフの自己肯定感、絶対的肯定は愛と大地信仰と自然の中にある。彼自身このことを感じている。
- ・ スヴイドリガイロフとソーニャの関係が興味深い。初めてスヴイドリガイロフに会った時、ソーニャは恐れをなした。その心情が興味深い。
- ・ ソーニャのような人間は実在するのだろうか? ソーニャとリザヴェータは十字架を交わした姉妹の関係にあり、両者とも分離派のなかの鞭身派である。
- ・ ミコールカも分離派であり、逃亡派である。ミコールカは自分に罪がないにもかかわらず自首した。リザヴェータも罪がないのに殺された。ソーニャは娼婦になり、稼いだお金を父親の飲み代に使われている。3人は普通の人ができないような、できないようなことをしている。この点がどこかキリストにつながるのではないか?
- ・ スヴイドリガイロフの妻マルファとドストエフスキーの初めの妻マリアには重なる部分がある。マリアはマルファのモデルのような部分が見て取れる。
- ・ ドストエフスキーには苦しめられている人々に対する共感がある。また、彼の小説には「絶対」はない。  
(上記議論は全体の一部です)

### 次回予告

日時: 2025年12月13日14:00~17:00  
場所: 文京区勤労福祉会館 第3洋室  
報告者: 熊谷暢芳さん  
テキスト: 『罪と罰』第8回